探偵アリス1
あぶのおおかみ

探偵アリス１

あぶのおおかみ

1

パーティがダンジョンの最深層部へと近づくにつれ、周囲を取り囲む冷たい闇が重さを増したように感じられた。
アリスはバックパックから予備の発光ロッドを取り出し、折り曲げて点灯すると前を行く剣士のアッシュが持つ光量の低下した古いロッドと交換するために差し出した。
「すまないな…。やはり錬金術師の君がパーティに加わってくれて助かったよ。君の用意してくれたアイテムがなかったら、こんな深層までこうも易々と来れたかどうか」
新しいロッドを受け取りながら、髭面の剣士が言う。動くたびにチェーンメイルの金属が触れ合う音が濡れた壁面にかすかに反射して耳に届く。
「最下層はまだ先なの？」
アリスは前方の闇の中を透かすように見た。
「この『闇の回廊』を抜けたらすぐのはずよ」
アリスの後ろに続く魔法使いのミドリが答えた。長い黒髪と黒いローブが闇と交じり合って新しいロッドの明かりに白い顔だけが浮かび上がるように見える。これも漆黒の瞳は、だが、面白がっているような光をたたえていた。
「こんなところまでやって来たんだ、レアなアイテムがゲットできることを期待したいもんだぜ」
最後尾から今回の冒険のスポンサーでもある、商人のボギが言った。このダンション探索にあたりほかの三人を雇った男だ。油断のない目つきとよく引き締まった体の持ち主だ。商人といっているが、盗賊でもあるのだろうとほかのメンバーは察しをつけている。アイテム業者に半盗半商のものが多いのはこの世界では常識でもある。
「ああ、だが油断はするなよ。この先にはかなり強力なモンスターがいると聞いているし、競争相手のパーティも一つや二つじゃないはずだ」
アッシュが前進を促して、再び先頭に立った。パーティはまた暗い回廊を進み始めた。道は緩やかな

螺旋を描きながら徐々に下降しているようだ。

それは突然だった。一行はいきなり闇を抜けたと思うと、不気味な赤い光で満たされた円柱の立ち並ぶホールのような空間に立っていた。差し渡しは２００ｍにもなろうか、遠くの壁面にいくつもの入り口が黒々と並んでいるのが認められる。空気には電気を帯びたかのような緊張感が満ち、ぴりぴりと皮膚を刺激するように感じられた。

「どうやら目的の場所の入り口にたどり着いたようだぞ」

剣士はすでに背負った大剣の柄に手をかけながら、慎重に辺りを見回した。確かに重なり合った柱の陰に何が潜んでいても不思議はない。アッシュはおもむろに剣を抜き、油断なく構えながら仲間の準備ができるのを待った。

「油断するなよ。ここはまずお約束と言っていいからな」

「お約束とか言わないでよ」

溜め息をつきながらも、ミドリも杖の封印をはずして魔力注入を行う。あらかじめ十分な魔力を溜めておけば、とっさの場合にも呪文詠唱なしで魔法を開放できる。

無言のまま、ボギが前へ出てアッシュの左斜め後方に着く。その両手にもすでに冷光を放つ鋭いナイフが握られていた。

入れ替わるようにアリスは最後尾に着く。錬金術師である彼女は、あまり直接戦闘は得意じゃない。それでも腰のホルスターから自分専用のハンドガンを引き抜き、マガジンを確認してスライドを引き、初弾をチャンバーに送り込む。今日用意してきたのは、このダンジョンに生息するモンスターに特に浄化力がある炎属性のカートリッジだった。もっとも高レベルの敵に対しては気休めに過ぎないかもしれないが…

突然現れたそいつの最初の一撃がきたときにもすでに備えはできていた。にもかかわらずアッシュのダメージは小さくはなかった。ブロックした剣ごと背後の柱に背中から叩きつけられ、堪らずうめき声

を上げる。ホールの向こう側の壁まで3分の2ほど進んだ場所だった。最もモンスターと遭遇しやすいと思われるような位置だ。誰もがそう思っていたので不意打ちを食らうことはなかったのだが…

「ド、ドラゴンだと？　こんなところにか！？」

ボギがすばやく飛び退る。

「で、でかい！！」

襲ってきたのは鋼のような鱗に全身を覆われた巨大な黒いドラゴンだった。通常この種のドラゴンは山岳地帯に棲息していて、こんなダンジョンの最下層で遭遇することはまずありえないのだが。しかも、通常より遙かに大きい。

「アッシュ！　さがって！！」

ミドリが火炎魔法でドラゴンを牽制しながら叫んだ。アッシュは転がるように後退する。ひざを突いたアリスのそばに転げ込んでくると、背中の傷のせいか再びうなった。すかさずアリスはポケットから回復薬を取り出して、すばやくアッシュの太い二の腕に注射した。即効性の回復薬によってたちまち治癒したアッシュは飛び起きざまに剣を構えた。

「どうする！？」

そのまま仲間のほうに視線だけを一瞬飛ばして問いかける。

「どうするもこうするも、まるで想定外よ！　対ドラゴン用の準備なんてしてきてないわ！！」

「俺もだぜ！！」

ミドリとボギがかすれるような声を出した。

「ここは、退くしかない…かも知れないよね？」

アリスの声は、状況に不似合いなほどのんびり聞こえる。

「かも知れないじゃなくて、それしかないでしょ！！」

ミドリが少し苛立つ。

ドラゴンの目をくらませていた炎と煙が薄れ始めてきていた。

「でも、元の場所に戻りきる前にドラゴンのブレスくらっちゃう…かも知れないよ？」

アリスはミドリの苛立ちにはあまり気がついてないようだ。

「向こう側の壁の入り口のほうがたどり着き易いよ

うな気がするし…」
「あっち側の入り口に行こうとすれば、ここを迂回してもまた別のモンスターが出てくることは自明だぞ！」
とボギ。
「それもお約束だな」
「だからお約束言うな！」
アッシュの言葉にまた苛立つミドリ。
「でも、それもまたドラゴンである確率は低い…んじゃないかな？ 普通にいるやつなら対抗できる装備あるし、ほかのモンスターと戦闘状態が成立すればもうドラゴンは攻撃してこない…はずだよね？」
「なるほど！ それもまたお約束だ。よし、それに乗った！！」
アッシュの叫びに、今度はミドリも異論を唱えなかった。もう煙が晴れてしまう。パーティは別の入り口を目指して走り始めた。
「はぁ、何とか助かったぜ…」
ボギは荒い息をつきながら言った。残りの者たちも息を整えるのに床に倒れこんでいる。あれから現れたのは、通常通りこのダンジョンつきのグール３体だけだった。パーティはなんとかそいつらを倒してやっと反対側の入り口に倒れこむように走りこんだのだ。
「いや、ホント、アリスのとっさの判断がなかったら危なかったぜ」
「いや、ちょっと思いついただけだし…っていうか」
アリスも息切れしていたが、口調だけはいつもと同じようだった。
「だから、あんたさぁ…」
ミドリが、やれやれという感じで言う。
「もうちょっと断言しちゃってもいいんじゃない、言葉。あんたって結構、いい考えもあるんだからさ」
「そ、そうかな…うん、そうかもね」
「はぁ…」
また何か言いかけたミドリを、アッシュが制した。
「静かに！ 何か聞こえるようだ」
一同は口を閉じて耳を済ませた。
「戦闘の音のようだな。魔法はなし。通常の武器の

みでの戦いか… どうもモンスター相手でもないようだぜ。ほかのパーティ同士がかち合ったか、それとも…」

一番耳と勘のいいボギがささやき声で言った。アッシュはうなずいてこたえる。

「ここにいてもなにが起こっているかわかりやしない。とにかく、行って確かめてみようじゃないか…」

2

「それで、どうしたって？ 結局お宝はゲットできなかったのか？」

錬金術師アリスの家。この町でただひとつのドラッグストア。その奥の小さな部屋のテーブルの上におかれた水晶球の台座から教授の声がした。透明な水晶の中に浮かび上がるその表情は少しばかり不機嫌そうだ。アリスのとりとめのない冒険の話に半ばうんざりしているのだろう。

「ああ、ですからね、教授」

アリスのほうは例によってそんなニュアンスなど理解できず、そのまま話を進めていた。

仕方がない。彼女にはまだ人間の顔のパーツがその皮膚の下の筋肉の動きによって微妙にその形状と相対位置を変える事と、そのときの心理状態との相関について十分な認識ができていないのだ。教授とてそれは承知している。だが、まずはここで彼女はなすべき課題をクリアしなくてはならない。次の段階に進むのはその後だ。

今は自由に話させておこう。それこそが最も重要なことだ。教授はタバコを咥えて火をつけた。

「あったのよ。あったの、その、死体が」

「それで？ そのとき君はどう思った？ どう考えて何をしたのかな？」

「もちろん、ここで何があったのか、そいつに訊いてみたよ…でも…」

「でも？」

「何も答えてくれなかったんだよ、その死体。まるで、ただの屍のようでさぁ」

「じゃあ、ただの屍だったんじゃないのか？」

「違いますぅって…多分。屍じゃなくって死体ですってぇ…きっと」

何事もなかなかこうと断言しないアリスにしては結構強く主張しているようだ。

「だって、再生薬を使ったらちゃんと甦生したんだもん。屍だったら生き返るはずはないでしょ？ ない…よね？」

「ほう、仲間でもないのにずいぶんと気前のいいことをしたもんだな」
「ミドリ達もそんなこと言ってたけど、だって知りたかったんだものぉ。再生させたらお礼に話をしてくれるんじゃないかと…
　それなのに、生き返っても動かないし、喋りもしない…もしかして、なんかの呪いがかかってるのかと思って手持ちの回復薬ありったけ試してみたけど…」
「ありったけだって？」
「そ。そしたらミドリたちが怒って…」
「そりゃ、怒るだろ」
「こんなところで回復系の装備を使い果たしたら、先へ進めない。せっかくここまで来たのに引き返すしかないって」
「それでお宝ゲットはパーか」

　教授はフィルターまで焦げてきたタバコを吸殻の山が盛り上がった灰皿のふちでもみ消し、すぐに次の一本に火をつけた。

　アリスめ。どうもこいつと話していると本数が増える。いや、わかってはいる。自分以上にわかっている者などいない。それでもだ。
「アリス。じゃあ君はそれ以上のダンジョン探索より、目の前の死体の…その…死因を知ることのほうがプライオリティが高いと判断したということかな？」
　これは…アルゴリズムを見直さなくてはならないかもしれない。

「だって…」
　Automatic Learning Intelligence with Clean Experience Ver.0.33 通称アリスと呼ばれる学習実験中の試作人工知能は別に悪びれる様子もなく言った――まだそんな概念は学習していないのだから。
「すっごく変…だったような気がしたんだもの！」